
機械仕掛けの僕たち

青空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械仕掛けの僕たち

【Zコード】

Z5636A

【作者名】

青空

【あらすじ】

もう人がヒトではなくなっていた。最愛の人を失い、手に入れた物は『エンジエイル』という人形だった……。

第1章 始まりを告げる悲劇

科学が進んでいく中。

もうどれが『ヒト』なのかさえ、分からなくなっていた。

町を歩けば必ず居る【人形】たち。

それらにはちゃんとした名前がある。

人がヒトを創つたのだ。

世界が絶賛した最初の人形【サリナ】から始まつた。
世界的大企業の会社、ドーラル社が創りあげた傑作。

人のように行動し。

人のように喋り。

人のように個性がある。

ドーラル社はこの人形達『エンジエイル』を世界的に売り始めた。
すぐさまこの情報は全国に広がつた。
おもちゃ会社はもちろん。

電気会社などもすぐ買い始めた。

自分で顔を選び、性格を創り、言葉、表情、名前、スタイル……。

人々は追求し続けた。

波紋のように乾いた世界を潤した。

*

3ヶ月前、最愛の恋人を失つた。

「う、そだろ……？」

現実だと知るのに時間などいらなかつた。

ああ、もういないと。

悲しいというより、寂しかつた。

冷えた体がより現実感を増させていった。

「残念ですが」

そんな医師の声さえリアルだった。

「無駄になっちまつた」

一人きりの部屋の中でぼつりと声を落とした。
小さい箱。

開くと真ん中に指輪が寂しそうにあった。

今日、渡すつもりだった物なのに、わたすほんにんがいんなくち
や意味がない。

端無十八はゆっくり息を吐いた。

こんなことドラマの中だけのことかと思つていた。

現実に、しかも目の前でおこるなんて思つても見ないことだつた。
そんな彼が『エンジエイル』に出会つたのは1週間前だつた。
でつかいショーウィンドウに『エンジエイル』の原型、『ドール』
が並べてあつた。

様々な顔立ち。

スタイル。

店の中にはいると顔のパーツ、髪が並べてあつた。

はたから見れば不気味な後景だ。

そこには、綺麗なガラスケースに入つた愛する人がいた。
息が止まつた。

死んだはずの人のがいた。

無意識なまま十八は購入していた。

No・777の非売品『エンジエイル』で、値段も他の『エンジ
エイル』に比べれば格段に高かつたが十八の家には金が有り余るほ
どあつた。

十八は家に帰つてすぐプレグラムを入力し始める。

愛する人の名前、行動、言動、そして記憶を入れていく。

【この『エンジエイル』はドーラル社777体目の『エンジエイル』です。外見は完成済みですが、他の機能は備わっていないので独自で入力してください。

なお、この『エンジエイル』は特殊で、自分が『エンジエイル』ということを知らないのであらかじめご了承ください。……では、貴方の幸せを祈っています】

箱に入っていたデジタル説明書を聞き終えると、箱が自動的に開いた。

綺麗な栗色の髪にガラス玉のような瞳。

まさしく彼女だった。

「おはようございます」

【貴方の幸せを祈っています】

もう壊れていたんだ。

でもどうしても支えがほしかったんだ。

第2章 暗い闇の中での光る涙

最悪だ。

寝過ごした。

十八は髪をぐしゃぐしゃにしながらうなつた。

「おーいまりやあ！ 起きろひつて！」

隣で気持ちよさそうに眠っている恋人を起こす。

「んにゃ？ もー朝？」

「朝？ ジャねえって、はあ。お前本当に朝駄目なんだな」

そつくりだ。

起きるときの変な奇声や、朝が弱いといひやなにげに料理上手いところとか全部。

まりやは眠たそうに田をこすりながら朝食を作り始めた。

十八は急いで会社に行く準備をする。

今年でもう23才だ。

しかも、通つてゐる会社はあのドーラル社、まりやを創つた会社。あれからもう半年、か。と十八は眠そうに朝食を作つてゐるまりやを見てほほえむ。

最初の時は大変だつた。

まだ体が慣れていないのか、慌ただしかつたが今では完璧な『まりや』になつてゐる。

「とー やー できたよー」

まりやがキッチンから十八を呼ぶ。

おいしそうなにおいが鼻をついた。

料理の腕は『変わつてない』な……、と十八はうれしそうにいすに座る。

「んじや、いただきます」

一人で手を合わせて食べる。

これもいつもの習慣だった。

時計を見るともう後數十分で遅刻になる時刻だった。

十八は急いで朝食を平らげる。

「いってきまーす！」

まりやが手を振つていた。

*

私が生まれた場所は暗くて、暗くて、まるで深い海のよつなどころだつた。

毎日何人かの話し声が聞こえてくる。

凄く不気味な場所。

たまにくすくすした笑い声もしてくる。

「これがN.O.・777体目の『エンジエイル』？ 何が特別なんだ？」

少年の声が暗い部屋に響いた。

「綺麗な子だろ？」

そばで私を見ている少年より少し大人な声の青年が答えた。

少年は不服そうな声で反論した。

「それなら、他の『エンジエイル』と一緒にじゃないか！ こんなもののために、父さんは」

最後の言葉はよく聞き取れなかつた。

青年はしゃがみ込むと少年の頭を優しくなでた。

少年の目には涙がたくさんたまつて今にもあふれんばかりで、とても綺麗だったのを覚えている。

「違うよ。彼女はね、とても綺麗な子だよ。他の『エンジエイル』とは違うすこいく純粋な子なんだよ

大丈夫。君のお父さんは正しいことをしたんだ
青年の優しい声も覚えている。

綺麗なガラスケースの中で私は待っていたのかもしれない。
目にたくさん涙をためてなお、何かを我慢している少年に……
会いたかった。

*

「ただいま」

「おかえりっ」と一や

まりやは十八に飛びつきながら言つ。

その反動で十八の体は後ろのめりになる。

このぬくもりはまさしく『ヒト』で、『エンジニヨール』という人形とは思えなかつた。

十八はまりやのぬくもりを感じながら抱きしめた。
本当に寂しかつた。

「とーや？ ご飯さめちゃうよ？」

まりやの不思議そうな声にはつとまる。

「そだな、食べるか」

「うんっ！」

机の上には豪華な料理が並べられていた。
おいしそうなにおいが鼻をかすめた。

あの日からいつも一人だつた。

広い部屋に立つた一人置いて行かれた。

ただいまかと行つても誰も答えてくれない。

帰つても料理なんて無い。

寂しかつた。

寂しくて、寂しくて、あの時。

ガラスケースの中でこの『エンジエイル』を見つけたとき死ぬほど
うれしかつたんだ。

やつと、見つけたんだと思つた。

抱きしめたときのぬくもりに十八は安堵した。
いつも側にいる。

俺だけの『エンジエイル』……。

誰がどう考へて創つた？

*

第3章 因果は巡る、巡る……

スローモーション。

最愛の人が死ぬ瞬間を、俺は見た。
でも知らない。

何で死んだんだ……？

気がついたら病院で、医者が居て。
あれ？

なにも覚えていない。

ショックだつたから、だよな。

*

目を覚ましたら誰もいない。
そんな夢を見た。

でも起きたらちゃんとそこに君が居るんだ。
そんな些細なことでも幸せになれた。

「まーりや。朝だよ」

起こす相手が居る。

愛しい人がいる。

十八は優しくまりやの髪をなでた。
するりと髪は十八の指をすり抜けた。

生糸よりも纖細で、綺麗なまりやの髪。それは十八の好きな物の
一つだった。

他にも、どんな宝石より綺麗な瞳。

柔らかくて温かい肌。

優しい笑顔。

十八はその一つ一つを触れて確かめた。

朝日がカーテンの隙間をすり抜けてまりやに当たった。まりやはまぶしそうに寝返りを打つた。

自然と十八の顔はゆるむ。

時計を見るとまた遅刻すれすれの時間だった。急いでまりやをゆすり起こし始める。

「まつりつやつ！ 朝だよー、起きてご飯作つてつ んつ、と十八の手を振り払う。

「ショーガないな」

そつと額に口づけした後、十八はベッドから降りた。カーテンをシャツと開ける。

まぶしい光がいつせいに入り込む。

まりやは数回瞬きを繰り返し起きた。

「おはよお」

ふにゃりと柔らかい笑顔で十八を見た。

「おはよ。早くご飯を作つて」

「うん。ショーや待つて！ すぐ作るから」

髪を手くしでとかしながらエプロンを着ける。

十八はせつせと服を着替え始める。

今日もぎりぎりかなあ、と思しながらも顔がにやけてしまう。

「お父さんー！」

田にたつぷりの涙をためて大声で叫んだ。

「十八……『エンジエイル』はただの機械じゃないんだよ。自分で考えて、行動する。考えてごらん？」

何故『エンジニヤル』はヒトの側にいる? ヒトはね、待つて居るんだよ

彼は続けた。

「支えを……愛する人を。側についてくれるヒトを。待つて居るんだよ」

少年は興味がないようじてつぽに向いた。

聞きたくない。

そんなこと言い訳なのだ。

まだ話を続けようと/orする彼を遮るように叫んだ。

「うるさいっ!」「

もう何も聞きたくない。

もうこれ以上彼を嫌いたくない。

耳をふさぐ。

そんなことなんの意味もないのに。

それでも彼は続けた。

「だから、…………」

そんなこといいわけにもならないじゃないか。

『エンジニアル』なんて嫌い。

機械なんて嫌いだ。

そんなもののために彼は全てを捨てる。
嫌いだ。

あんなのただの機械じゃないか!

自分で考えるなんてそんなのただプログラムしてあるだけなのに。
機械が本当に人を愛する事なんてできることないのに。

『綺麗なだけじゃないか』

ぱつりとつぶやく。

綺麗な顔立ち。

スタイルだつていい。

でもただそれだけ……。

綺麗なだけでなんになる?

彼はそんな綺麗な『人形』を作るために死んだのか？

それならとんだ大馬鹿野郎だ。

「どうしましたぼっちゃん？」

「ぼっちゃんまあ言うな。氣色悪い」

男はくすっと笑うと頷いた。

少年はうざつたそうに男を見てからまた『エンジエイル』を見つめる。

「お綺麗ですね、あなた様はお父様がお嫌いですか」

男が笑顔のまま訪ねると。

少年は小さく首を振った。

『エンジエイル』を見つめながら口を開いた。

「違う。違うから、嫌なんだよ！」

『エンジエイル』が入れられているケースをドンッと殴る。

それでもびくともしない。

彼女は静かに眠つたままだつた。

少年はなお殴り続ける。

綺麗な顔はゆがまずただ平然とケースの中にいた。

「……この方はあなた様のお父様の初恋の方にそつくりですよ。初恋と言いましても旦那様は生涯でただ一人だけを愛し続けたんですけどね」

男は真っ赤になつて手をなでながら話した。

少年は黙つて聞いていた。

「ぼっちゃん、なにがお寂しいのでしょうか？」

「ぼっちゃんまあ言うな」

男は少し顔を驚かせてから笑つた。

「そうでしたね」

なでる手を休まず話した。

少年は相変わらず目に涙をためても流しはしなかつた。

「あなた様という方がいて、旦那様はさぞかし幸せでしたでしょうに……」

もちろんわたしも、と男は言った。

*

「とーや、私……………幸せだったよ」

他人の幸せを押し付けないでくれ。

「旦那様はさぞかし幸せでしたでしょ」「……………」

死んだ人のことなんて知らないつ。

あなたの幸せを願っています。

ああ、幸せだよ。

他には何もいらないから。

これ以上俺からなにも奪わないでくれっ！

第4章 友達、ともだち、トモダチ

わたしは創られた『ヒト』です。

わたし、アスカは桜城アヤメさまのために創られました。
アヤメさまは私に姿と名前をくださいました。
とてもお優しい方です。

他にはわたしに服をくれました。

わたしに喋りかけてくれました。

そう、アスカはアヤメ様のために存在しているのです。
暗い箱の中にわたしはいたのです。

そのときのわたしには名前などありませんでした。

『ドール』といつういわゆる『エンドジョイユル』の基本体でした。

そして、たくさんある中のひとつからアヤメさまはわたしを選んでくださいました。

とてもお優しい方なのです。

「アスカ？ そんあとこりでつたつてなにやつてんの？」

「アヤメさま！ なんでもありませんわ」

「そ」

アヤメさまは本当にお優しい方なのです。

『エンドジョイユル』のわたしにさえ優しくお声をかけてくださるのです。

だからわたしはアヤメさまのために動くのです。

「アスカ、暇なら外行こうよ……暇」

皆さん誤解されますけど、アヤメさまは不器用なだけなのです。

「はいっ喜んでお付き合いさせていただきます」

「んじゅと一緒に天空園行こ？ あそこクレープ美味しいんだよ」

「分かりました」

「……アスカ、その格好で行くの？」

なにか問題があるのでしょうか？

一応この服はアヤメさまのお母様がプレゼントしてくれたものなんんですけど。

アスカが着ている服は可愛いふりふりがついた、俗に「ツメイド服。

アヤメが止めるのも無理はない。

「では、着替えてまいりますね」

*

アヤメさま。

わたしはあなた様にいいづくせないほどのお礼を抱えてあります。ですでの、もう少しだけお側にこさせてください。

最初、わたしは暗いお部屋にいました。

それはもう闇と呼んでいいほど暗いお部屋。

でも奥のほうには緑色の光が弱弱しく光っていました。

そして小さい男の子のお声と、男性のお声が聞こえてくるのです。わたしは残念ながら遠くで聞こえませんでしたが確かにそうでした。

た。

わたしはその部屋で4、5ヶ月ほどいました。

それから『エンジエイル専門店 セピア』に並べられました。

いろいろなかたがいましたが中でもとても美しく光るガラスケースにはいつていた方が一番綺麗でした。

N.O.777の方です。

アヤメさまにご購入されてからはお会いになりませんがきっとア

ヤメさまのような素敵な方に『購入されていればいいなと思つております。

お話を戻しますが、アヤメさまに『購入された理由は簡単に言ひと『お友達』としてだそうです。

アヤメさまは先ほど言つたとおり誤解されやすい人なのです。
わたしがはじめてここに来たときはお一人でいつもお寂しそうに『本を読んでおりました。

お声をかけても返事はなさらなかつたのです。

でもご購入されて1週間くらいたつたでしょうか？

初めてアヤメさまのほうからお声をかけていただいたのです。

それはもう天にも昇る気持ちでした。

「……あんたアンドロイドなんだつて？」

「ええ、そうですよ」

アヤメさまのお声は嬉しそうでした。

前とは打つて変わつた優しさでしたがわたしは嬉しさのあまりさほど深くは考えませんでした。

「あんたの顔と名前、私がつけたんだよ

「それはありがとう』ございました」

「アスカとアヤメ……似てるでしょ？ 気に入つてくれた？」

わたしはとてもお優しい顔をなせつて『アヤメさまを初めてみました。

でも不思議と違和感はありませんでした。

ただとてもお美しいと思いました。

「もちろんです。アヤメさま」

そう言つとアヤメさまは笑つてくださいました。

そして、わたしは思つたんです。

ああ、私はこんなお優しいお方に『購入されて幸せだと。心から思いました。

「やっぱり、アスカならそう言つてくれると思つた」

私はアヤメさまが大好きです。

とても言葉にい表すことが出来ないほど。

わたしが思い出にふけつてこむビデオの向ひつかうアヤメちゃんの
お声が聞こえました。

「アスカ～置いてくぞ」

「あー！ お待ちくださいアヤメさまー！」

いいんです。

いつかわたしがいらなくなつたときが来ても。
いまはまだ、お側にいてください。

*

「十八あつ外行じつよー」

十八は久しぶりの休みとこじつとで、まりやに元ビリに行きたいと
聞いた。

「外、て……んじゃ あ天空園に行くか？ お前あそこのクレープ
好きだつたら？」

十八は当然そうだと思つて言つた。

だがまりやはハテナマークを頭上に浮かべた。

「そうちだつた？」

そうか、記憶はまりやが死ぬ2年前のしかなかつたのか。
ということはまりやの記憶では天空園のことは知らない……ああ
つ……ややこしい！

十八は頭をガシガシやりながら言葉にならない声を出す。
まりやはいまだ不思議そうに頭を傾かせていた。

やつとついた天空園は人であふれていた。

覚悟はしていた。

だが、まさかここまでとは……と十八は後悔する。

後の祭りだ。

「とー やー クレープ！ クレープ！」

「ああ、はいはい」

はじめてきたからかすさまじいハイテンションだ。

『『はじめて』』というかきおくにないだけだが……。

「すいませんー チョコとストロベリーください」

「すいません。バナナとクリーム」

台詞がかぶつた瞬間といふのはなんとも気まずい。

ひょこつと十八の後ろからはまりや、アヤメの後ろからはアスカが顔をのぞかせた。

「どつたのー？」

「どうかいたしましたかアスカさま！」

今日は台詞がかぶつてばかりだ。

「はい、どーぞ。チョコとストロベリーのお客様と、バナナとクリームのお客様」

さすがANDROID。

仕事が早い。

四人が遠慮がちに受け取り、遠慮がちに代金を払う。座る場所も自然といつしょになつた。

「あのっ」

アスカがまりやに話しかける。

「ん、なーにアスカちゃんつ」

「その…………いいえ、あの、クレープ一口頂いておよひしいでしょーか？」

聞こうと思ったことは飲み込んだ。

言つてはいけないような気がしたからだ。

その選択は正しい。

まりやは笑顔でクレープをアスカに渡した。

「アスカちゃんのもちょーだいね」

「はい。どーぞ」

「あいつら仲いーな」

十八が遠めに一人を見る。

もう一人の世界というのだ。

少し切なくなつた十八だが、せつかくできたまりやの友だちだ。
我慢しよう。

「ねえ、あのこも『エンジエイル』?」

アヤメはクレープを食べながらしゃべる。

「も、てことはあんたのこも?」

「あーうん。そんなとこ」

残された二人もちらほらとしゃべる。

もつぱらまりやとアスカのことについての惚氣話だ。

「だーかーら! まりやは可愛いんだつーのつ! 料理上手いし、
仕草も顔も可愛いしつ!」

「はあつ! うちのアスカのほうが可愛いんだつづの! 料理な
んでもうプロ並みだよ! あのしゃべり方とか萌えじやない!」

「節穴つ!」

「趣味悪つ!」

意外と仲がいいコンビ。

十八にいたつてはクレープがあるのを忘れて拳を握つてしまつて
大変なことになつた。

*

そのいつかがくるまで、あなたのお金はどこで使われていい。わたしはもう心の準備ができておりますから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5636a/>

機械仕掛けの僕たち

2010年12月17日02時42分発行